劇場におけるアフリカの民族舞踊

遠藤　保子*
松田　　凡**

筆者たちは，アフリカで舞踊と社会に関するフィールドワークを行い，日本やアフリカにおいてその研究成果を公表してきた。日本ではアフリカの民族舞踊に直接触れる機会が少ないという現状を踏まえて，舞踊そのものを紹介しようとボランティア組織であるエチオプス・アート日本委員会を結成し，アフリカの民族舞踊公演を計画した。その目的は，１．アフリカの文化的多様性を日本各地で紹介すること，２．アフリカと日本との国際・文化交流，相互理解，平和友好の一助に資すること，３．舞踊の新しい隆盛に貢献すること，である。その際に，「舞踊まるごと体験」（アフリカで踊られている舞踊とそれにかかわる社会・文化を観る・知る・体験する）をキーワードに実施した。本稿では，日本の劇場で行ったエチオピア，ケニア，タンザニアの民族舞踊公演を検討した。その結果，舞踊や音楽を実際に聴き，観て，感じることにより，お互いの国際・文化交流，相互理解，平和友好に役立てることができたと思われる。

キーワード：アフリカ，民族舞踊，劇場，公演

はじめに

筆者たちは，これまでアフリカの舞踊や社会に関する文化人類学的な研究を行なってきた。研究は，研究目的を明らかにするために行うもので，研究者の興味・関心から出発する。だが，アフリカにいる人々を巻き込んで行われるフィールドワークの場合，研究者の興味・関心の探求だけで終わっていいはずはない。協力してくれた関係諸機関や個人に研究成果を公表することは，研究者の義務であり，責任である。その観点に立って，遠藤は，日本だけではなくアフリカにおいても研究成果を，時には日本の舞踊や文化もまじえて以下のように報告してきた：１．1999年８月，エチオピアのアディス・アベバにあるファーガーフィクレ劇場[1]，２．2006年３月，及び2009年２月，ナイジェリアのラゴスにあるナイジェリア国立劇場とベニンシティにあるベニン大学[2]，３．2007年８月，ケニアのナイロビにあるボーマス・オブ・ケニアとジョモケニヤッタ大学[3] など。

さらに舞踊そのものを紹介しようと，筆者たちは，1996年，ボランティア組織であるエチオプス・アート日本委員会[4] を結成し，1997年か

＊立命館大学産業社会学部教授
＊＊京都文教大学人間学部教授

らは立命館大学応用社会学研究科・大学院生[5]も委員となり，アフリカの様々な民族舞踊団を日本へ招聘して，各地の劇場で舞踊公演を行い，また反対に日本人舞踊家や学生による舞踊団を組織してエチオピアへ赴き，アディス・アベバにあるシェラトンホテル，ヒルトンホテル，エチオピア国立劇場などで舞踊公演を実施してきた。これまでの公演活動は，以下である：１．1997年12月，「クイーン・シバ舞踊団日本公演」[6]，２．1999年２月，エチオピアにおける「平和創造プロジェクトハートフルセッション」[7]，３．1999年10月，「エチオピアの民族舞踊団日本公演」[8]，４．2003年10月，「ケニア民族舞踊団日本公演」[9]，５．2006年８月，「ケニアの律動」[10]，６．2008年11月，「タンザニアチビテ舞踊団日本公演」[11]，そして2011年は，ガーナの民族舞踊団を招聘する予定である。

上記をふまえて本稿では，エチオプス・アート日本委員会が日本で行った，劇場におけるアフリカの民族舞踊公演を事例に，第１に劇場でアフリカの舞踊公演を行う意味とは何か，第２にどのように公演を行ったか，第３にどのような結果になったのか，を明らかにする。そのために以下の項目を検討する：Ⅰ　日本におけるアフリカの民族舞踊公演，Ⅱ　民族舞踊公演の目的と意義，Ⅲ　劇場における民族舞踊，Ⅳ　民族舞踊公演の実際，Ⅴ　まとめ。

なお，遠藤（2001）は，『舞踊と社会～アフリカの舞踊を事例として～』の中で，前述した公演活動１，２，３の概要を述べている。本稿の内容と一部重複するが，ここでは民族舞踊をいかに公演したのかという点に照準をあてて検討する。さらに，アフリカは，サハラ砂漠を境にして以北をアラブ・イスラム文化圏，以南を黒人アフリカ文化圏と分けて考えられることが多いが，本稿では，アフリカ大陸として考える。

Ⅰ　日本におけるアフリカの民族舞踊公演

日本においてアフリカの民族舞踊は，どの程度公演されているのだろうか。ここでは，次の３点に焦点を絞って検討する：１．芸術支援を行っている国の機関の１つである国際交流基金，２．文化庁から委託をうけて舞踊年鑑を発行している全日本舞踊連盟，３．一般財団の中から特に民族舞踊公演を実施している財団法人民主音楽協会。

Ⅰ・１　国際交流基金

国際交流基金は，1972年に外務省所管の特殊法人として設立され，2003年10月１日に独立行政法人となった。文化芸術交流，海外における日本語教育および日本研究・知的交流の３つを主要活動分野としており，日本における海外の舞踊団公演も助成している。

では，アフリカの舞踊公演は，どの程度助成しているのだろうか。

同基金の公演助成に関するデータの公表形式が異なるため，連続する時系列的変化を見ることができないが，同基金の年報によると，1976年度以降，アジアの団体による舞踊や音楽の公演を主催・助成してきたことがわかる。

アジア以外の国から招聘した団体の公演を行ったのは，1983年度が最初である。1983年度には，全３団体の公演を助成・主催しているが，このうち，「ザンビア合唱団」がアフリカの団体である。翌1984年度には全９団体の公演を主催・助成している。このうち，アフリカ民族舞踊団親善公演（「チュニジア国立民族舞踊団」と「ザイール・モブツ・セセ・セコ国立舞踊

団」の合同）と，ナイジェリアのポップ歌手であるサニー・アデ一行（27名）のコンサートの，計２公演に対し助成を行っている。

1985年度には，アフリカの団体による公演を行っていないが，1986年度には，全４公演中，「アフリカ・フェスティバル」として３カ国（コート・ジ・ボワール，ザイール，モロッコ）合同のコンサートに対する助成を行っている。

このように，1983年度以降，国際交流基金ではアフリカや中近東の公演が助成され始め，2008年度に至るまで，アフリカの公演を主催・助成している。地域別の割合から見ると，もっとも主催・助成数の多いのは一貫してアジア地域であるが，アフリカの件数は上位２位から４位あたりをつねに維持している。

Ⅰ・2　全日本舞踊連盟

全日本舞踊連合（以下，全舞連）が，1976年に創立した時から，文化庁の方針でそれまで日本舞踊，現代舞踊，バレエ，児童舞踊の各協会が発行していた年鑑を統一し，文化庁から委託されて『舞踊年鑑』を発行している。この年鑑は，７ジャンル（日本舞踊，バレエ，現代舞踊，児童舞踊，舞踏，ジャズダンス，フラメンコ）にわたり日本の舞踊界を網羅した唯一の年鑑である。その中に記載されている「内外の動向」を中心にしてアフリカの舞踊公演数を調べた。ただし1976年～1983年までは，現在の年鑑と掲載方法が異なる。そのため，1976年～1978年は「現代舞踊公演記録」を参照にし，現代舞踊の全記録（日本の団体含む）に含まれる，アフリカからの来日舞踊団数，1979年～1983年までは「現代舞踊公演記録」「合同舞踊公演記録」に含まれる，アフリカからの来日舞踊団数を調べた。1976年～1983年は，日本と海外の舞踊団公演が区別なく記載されていたため，どれが海外の舞踊団なのかを判別することが困難であったものの，1982年だけは，チュニジア共和国民族舞踊団公演と明確に記載されている。1984年～2009年は，来日舞踊団数（重複有）の総数は，912団体，1984年は一番少なくて８団体，2006年は一番多くて53団体，平均すれば36団体であり，その多くがアジアや欧米の舞踊団である。そのなかでアフリカの舞踊団は，1992年１団体ナイジェリア国立舞踊団，2006年１団体カンパニー・ジャント・ビ，の２団体である。

Ⅰ・3　財団法人民主音楽協会

財団法人民主音楽協会は，次の点を理念に様々な活動を行っている（HPより引用）：１．音楽芸術を享受する喜びと感動を，より多くの人々と分かち合うために，民衆を主体とした多角的な音楽文化運動を目指し，２．各地域における音楽文化の更なる活性化や，青少年の情操を豊かにする音楽活動等様々な運動を通して，新しい時代における音楽芸術の興隆に寄与し，３．国家・民族・言語等の文化の相違を超えて，グローバルな音楽文化交流を推進し，各国家における相互理解と友情を深めていく。その活動の１つが民族舞踊公演である。その公演歴をみてみよう。1971年に開始して2009年までに123回の公演が実施されているが，その多くは，アジアや欧米であり，アフリカの公演は，以下の８回である：１．1991年３月，ケニア国立民族音楽舞踊団（12回公演），２．1992年３月，エジプト国立芸術団（16回公演），３．1992年７月，ナイジェリア国立舞踊団（20回公演），４．1999年８月，アフリカ音楽紀行①エチオピア国立民族舞踊団（25回公演），５．2001年８月，アフリカ音楽紀行②ダンス・オブ・アース

（ザンビア国立民族舞踊団，35回公演）６．2003年８月，アフリカ音楽紀行③果てなき神秘の王国「モロッコの音楽」（18回公演，アミナ・アラウィ，タチノイテ，グナワ），７．2005年８月，アフリカ音楽紀行④セネガル国立舞踊団（16回公演）８．2007年８月，アフリカ音楽紀行⑤マダガスカル（19回公演）。

上記をまとめると，１．国際交流基金は，比較的アフリカの民族舞踊公演を助成している。２．『舞踊年鑑』では，1976年～2009年においてアフリカの来日舞踊団数は３である。ただし，国際交流基金助成をうけて実施した公演や財団法人民主音楽協会の公演がデータとして反映されていないものがある。３．財団法人民主音楽協会では，全舞踊団数は123，そのうちアフリカは８である。

これらを総じて考えると，日本におけるアフリカの民族舞踊団公演回数は，決して多いとはいえない。これは，つまり，一般の日本人にとってアフリカの舞踊を実際に目にする機会が限られている，ということを意味している。

Ⅱ　劇場における民族舞踊

アフリカの民族舞踊は，もともと劇場（額縁舞台）で上演されていたわけではない。それにもかかわらず，劇場で舞踊公演をすることが，本来のアフリカの舞踊を紹介することになるのだろうか。その答えを得るために，今日のアフリカにおける舞踊の現状を探ってみたい。

Ⅱ・１　本来の民族舞踊

アフリカの民族舞踊は，もともとある共同体の広場，市場，家庭などにおいて，子供の命名式，結婚式，葬式などの人生の節目に，五穀豊穣，家畜多産，家内安全などを祈願する祭祀の一環として宗教的な側面を有して踊られ，あるいはリズミカルな動きによる陶酔感を味わい，人々と集い，楽しむために踊られていた。舞踊教育研究者の松本千代栄（1957：２-３）は，原始社会の舞踊に関して，以下のように述べている：抽象的な言語に乏しい彼等は，集族の象徴として，偉大な力を持つ自然や動物を崇拝し，目の前にあるものに結びつくことによって，彼等自身も互いに融合し，集簇としての生存力をかためていた。（中略）集族を外敵から守るために，集族自体の破壊を防ぐために，あらゆる必要に応じて踊りが活用され，踊りは，原始社会組織の紐帯をなしていたとみられる，と。

また，舞踊研究者のマーガレット・ドウブラー（1974：６-７）も，以下に示すように同じような見解を述べている：原始人は，集団で共に生活し，共に働くことにより，たんなる個々人が成就できるよりも，より大きな効果をあげることを自覚し始めた。初期の人間社会においては，初期の人間社会においては，舞踊の主な重要性が，その社会的・宗教的生活の本質部分として機能をはたしている，と。

このように舞踊は，共同体の中で，重要な役割を担いながら，親から子へ，子から孫へ口頭で伝承されてきた。

Ⅱ・２　今日の民族舞踊

今日のアフリカにおける民族舞踊は，様々な面において変化してきている。例えば，エチオピアのアディス・アベバやケニアのナイロビでは，プロの舞踊家が誕生し，練習場を借りて人々に民族舞踊を教え，レストランでは宗教的な意味のある民族舞踊を客のためにエンターテインメントとして踊っている。その舞踊は，舞

踊人類学者のユーディス・ハンナ Judith Hanna（1965：13-21）が指摘しているように，地域的・宗教的であるより，劇的・娯楽的になってきている。また，プロの舞踊家が誕生したということは，前述した口頭伝承が機能しなくなったとも考えられる。さらに，最悪のケースでは，消滅する危機に瀕している舞踊もある。例えば，2001年５月，遠藤は，フィールドであったナイジェリアのオヤン村へ行ったが，回教徒の王位継承者が王に就任したために伝統的な宗教と結びついた祭りは禁止され，祭りで踊られる民族舞踊も踊られなくなっていた。

このような現状を踏まえて，アフリカ（エチオピア，ケニア，ナイジェリアなど。理由や経緯は若干異なる）では，文化と芸術を保護，上演，振興するために国立舞踊団を創設，国立劇場を建設し，伝統的な舞踊を保存・伝承・発展させている。

Ⅱ・3　劇場のとらえかた

劇場で民族舞踊を踊っているというアフリカの今日的状況から，日本の劇場で民族舞踊を公演することも，アフリカの舞踊を紹介することに繋がるといえる。ここでいう劇場とは，基本的には額縁舞台を意味している。しかしながら，額縁舞台ではないが，多目的ルームなどにおいてあたかも舞台があるかのように空間を利用した場合も劇場として扱っている（劇場に関する研究は，遠藤（1997）『舞踊における「劇場」的空間の変遷』参照。なお，次に述べる公演目的と演目のキーワードを考慮すれば，榊眞（2008：62）が指摘する「場」[12] の意味も含まれる）。

Ⅲ　民族舞踊公演の目的・意義・演目

Ⅱ・1　目的

エチオプス・アート日本委員会では，民族舞踊の公演を行う目的を次のように考えた：

１．アフリカの文化的多様性を日本各地で紹介すること

２．アフリカと日本との国際・文化交流，相互理解，平和友好の一助に資すること

３．舞踊の新しい隆盛に貢献すること

文化の相違を身体のリズミカルな動きによってシンボリックに表現する民族舞踊は，見るものにその国の美しさやエネルギー，世界観や思考法を体感させる格好の媒体だと考えられる。アフリカといえば，人々が飢餓に苦しみ，内戦によって難民がひしめき，開発援助を受ける国として，あるいは野生動物の王国としてのイメージが浮かんでくるのではないだろうか。だが，アフリカはそれだけに留まらない。文化や社会と密接にかかわって伝承されてきた舞踊や音楽は，そのようなステレオタイプ化したイメージではないアフリカの別の面を見せてくれる。

ではなぜ，民族舞踊団の公演でなければいけないのか。それは，以下による。アフリカの舞踊は，音楽家の演奏と共に，集団で踊ることが基本である。したがって，アフリカの本来の舞踊を再現するには，集団で踊る舞踊団の公演がよりふさわしい，と考えたからである。

さて，国際・文化交流とは何をさすのだろうか。塩谷陽子（2006：274）は，国際交流とアーツ・マネージメントの中で，交流の中身に関して１．アーティストと観客の交流，２．アーティストと劇場運営者との交流，３．劇場運営者

同士の交流など指摘している。本稿では，１の意味で用いている。

Ⅲ・2　意義

Ⅰで述べたように，日本ではアフリカの民族舞踊に直接触れる機会が少ない。したがって，民族舞踊の公演を行う意義は，アフリカの文化的多様性を紹介する機会をつくり，舞踊や音楽を実際に聴き，観て，感じることによって，お互いの国際・文化交流，相互理解，平和友好に役立てることである。さらに，もう１つの意義は，無文字社会であったアフリカにおいて，人々は文字に記すよりも，舞踊や音楽によって様々なことを表現してきた。そのような社会における舞踊や音楽を知ることは，その原点を推測できることである。

Ⅲ・3　演目

当該国においては，様々な民族舞踊が踊られている。では，それらをどのようにして選択し，どのように公演を実施するのか。エチオプス・アート日本委員会では，「舞踊まるごと体験」（アフリカで踊られている舞踊とそれにかかわる社会・文化を観る・知る・体験する）をキーワードに，以下の点に留意しながら実施した。

1．当該国における様々な民族舞踊を検討し，その多様性を紹介することを基本にする。
2．上記１と関連するが，特定の民族舞踊に集中しないように心がける。
3．舞踊動作の特性に留意し，それがよりよく見えるように舞踊家の配置などを考慮する。
4．衣装や照明などによって公演演目にふさわしい雰囲気をつくる。
5．舞踊とかかわっている社会・文化が理解できるような工夫をする。具体的には，舞踊演目の合間に様々な解説（舞踊動作が自然環境や社会環境を反映していることやどのような時に踊られているのかなど）を行い，可能であれば，現地の人々の暮らしを映像で紹介する。
6．舞踊家と観客とが一体感を味わえるようにする。具体的には，舞踊家や音楽家が舞台から観客席へ，また観客席から舞台へ入退場する過程で，両者のコミュニケーションを円滑にする。
7．集団で自らが踊るという本来の舞踊を劇場で再現する。具体的には，ワークショップの時間を設け，観客が実際に踊り，楽器を演奏し，歌う機会を設ける。
8．上記５と関連するが，舞台だけではなく会場全体を舞台の延長ととらえ，舞踊と社会が理解しやすいように写真，絵画，動く映像，あるいは生活雑貨，楽器，小道具などを展示する。

なお，上記の目的，意義，演目のコンセプトは，以下に述べるすべての公演に通底している。また，公演の所要時間は，会場によって多少異なるが，２時間を基本に考え，その中に休憩時間とワークショップの時間（数分間程度）を設けた。

Ⅳ　民族舞踊公演の実際

次に，エチオプス・アート日本委員会が日本で行った以下の民族舞踊公演について検討する：１．エチオピア，２．ケニア，３．タンザニア。これらを選択した理由は，東アフリカの

隣接する３カ国における舞踊の共通点と相違点を明確にしたいと思ったからである。（なお，３カ国の舞踊に関する研究動向は，遠藤2005：163-174参照）。さらに各公演に関しては，以下を報告する：１．公演準備，２．公演日程，３．招聘団員，４．公演演目，５．公演評価。

Ⅳ・１　エチオピアの民族舞踊公演

Ⅳ・１・１　公演準備

Ⅳ・１・１・１　1997年の場合

1996年春，公演の準備を開始した[13]。1996年８月，松田がエチオピアへ行き，招聘するにふさわしい団体を探し，1996年12月，国際交流基金に公演助成の申請を行いながら，以下を行った。組織・団体レベルの対応に関しては，外務省へ後援の申請を行い，在日本エチオピア大使館，エチオピア国際航空，日本エチオピア協会などへ協力・協賛・観客動員の依頼を行い，公演実施の可能性がありそうな文化財団，民族学博物館，大学などの機関に連絡をとった。個人レベルでは，エチオピアと舞踊に興味・関心をもち様々な活動を行っている画家，陶芸家，国会議員などに協力を依頼した。1997年４月，同基金の公演助成が内定し，打診した関係機関と個人の協力を得て，後述する会場で公演が可能になった。1997年８月，エチオプス・アート日本委員会のメンバーが，エチオピアへ行き，約１か月にわたって以下を行った：１．候補者の面接，２．招聘団員の確定[14]，３．招聘団員への聞き取り調査（経歴と舞踊歴など），４．マネージャーと公演内容の基本的な打ち合わせ。そして９月に帰国した後は，以下を行った：１．マネージャーとメールによる公演内容の確認，２．公演会場との打ち合わせ，３．パンフ

1. プログラム No.2
2. ダンス名称：ウォロ
3. 時間：4分
4. 人数：
舞踊家男４人　音楽家男３人
女４人　女１人
5. 楽器　ドラム，クラール
6. 作品の最初
板付き　飛び出し上　１人
下　１人
7. 背景　黒幕，ホリゾント
8. 作品のイメージ：
市場のイメージ，男女のかけあい，楽しく明るいイメージ
9. 衣装　白（基調）
赤，緑，青のオーナメント

時間	音の変化	構　成	照明案
	上手下手男女舞踊家（○）スタンバイ 音楽，明り	○　○ 客席	男女飛び出し，下手サスうす暗い 市場でのやり取り段々明るく 踊りだす
	舞踊家，音楽家（●）出る 音軽快	●●●● ○○○○→　←○○○○ ○○○○→　←○○○○ 客席	明るい
	音高く→低く	●●●● ○○○○←　→○○○○ ○○○○←　→○○○○ 客席	暗転 全体明り うす暗く
	全員飛び出す	●●●● ○○○○→　←○○○○ ○○○○→　←○○○○	うす暗く

図１　進行案（照明と音響）の一例

補足：上記の台形（舞台）に，出演者が舞台のどこからどこへ移動するのか，スタートは音楽か照明か，出演者が舞台にいるのか（板付き）などを記載する。　（筆者作成）

表１　確認事項

項　目	内　　容
スタッフのスケジュール	公演日，前日仕込み時間及び終了時間，開場及び開演時間，１及び２ベルの確認，終演時間，舞台道具搬入時間及び撤収時間
出演者のスケジュール	集合時間，場当たりの時間と内容確認，リハーサルの時間と内容確認，退場時間
会場	客席数，舞台の大きさ（縦と奥行き），形，舞台と客席の位置関係，舞台から天井までの高さ，リノリウムの確認，スクリーンとマイクの有無，照明と音響機器の確認，スライドとビデオ機器などの有無
その他	鍵の管理，会場スタッフ（受付，チケットモギリ，手伝い）人数の確認，入場料設定の可否，飲料水と食事の手配，物品とプログラム販売の可否，駐車場の確認

（筆者作成）

表２　公演日程（1997年）

月　日	時間	場　所	対　象	入　場　料
12月４日	19：00	東京，早稲田大学国際会議場	一般人	無料
12月６日	14：00	大阪吹田，国立民族学博物館	一般人	無料（別途入館料）
12月７日	14：00	滋賀，八日市芸術文化会館	一般人	前2,000円 当2,500円
12月８日	18：00	京都，京都文教大学	主に学生	無料
12月９日	16：30	京都，立命館大学	主に学生	無料
12月10日	13：00	京都，永松記念教育センター	障害学級の生徒	無料
12月12日	18：30	京都，国際交流会館	一般人	前2,000円 当2,500円
12月13日	19：00	京都，ホテルサンフラワー	主に学会員	無料（別途大会参加費）

（筆者作成）

レットやポスターの作成，４．マスコミなどへの情宣活動，５．チケットの販売，６．アナウンス原稿の執筆，７．進行案（照明と音響）の作成（図１参照），８．舞台監督との打ち合わせ。（１～８は，他の公演でも同様に行った。）また，公演実施に際して，スケジュール，出演者，会場，その他に分類して検討すると，様々な点の確認が必要である（表１参照）。

Ⅳ・１・１・２　1999年の場合

1998年秋，上記の公演に協力した在日本エチオピア大使館・大使マハディ・アーメド・ガディドが，再度公演を実施したいということから準備が始まった。1998年12月，国際交流基金に公演助成の申請を行いながら，遠藤はエチオピア大使と共に仙台市，佐久市などへ赴き，またエチオピア大使館とかかわりの深い企業などを訪問し，公演実現のための協力・協賛を依頼した。1999年４月，同基金の公演助成が内定し，エチオピア大使館の協力によって，準備は1997年よりスムーズに行われ，後述する会場で公演が可能になった。

表３　公演日程（1999年）

月　日	開演時間	場　所	対　象	入場料
10月９日	10：00	大阪，大阪城ホール	一般人	無料
10月10日	13：00	大阪，御堂筋パレード	一般人	無料
10月11日	13：00	大阪，万博公園	一般人	無料
10月13日	19：00	名古屋，今池ガスホール	一般人	無料
10月14日	19：00	東京，港区シティホール	一般人	無料
10月16日	13：00	長野県佐久，ホテルゴールデンセンチュリー	一般人	1,000円
10月17日	11：00	宮城県仙台，宮城学院女子短期大学	大学生	無料
10月17日	13：00&15：00	宮城県仙台，野外ステージ	一般人	無料
10月20日	16：30	京都，立命館大学	大学生	無料
10月21日	17：30	京都，京都精華大学	大学生	無料
10月24日	13：00	大阪，なみはやドーム	一般人	前1,200円 当1,500円

（筆者作成）

Ⅳ・１・２　公演日程

Ⅳ・１・２・１　1997年の場合

12月初旬，公演は，東京，大阪，滋賀県八日市，京都（公演順）で開催した（表２参照）。

Ⅳ・１・２・２　1999年の場合

10月中旬，公演は，大阪，名古屋，東京，長野県佐久，仙台，京都，大阪（公演順）で開催した（表３参照）。1997年に紹介できなかった日本の他の地域で開催し，より多くの人々に紹介することも視野に入れて開催地を打診した結果である。

Ⅳ・１・３　招聘団員

Ⅳ・１・３・１　1997年の場合

招聘した舞踊団の団員は，男性マネージャー１名を含めて15名（男性音楽家５名，女性音楽家１名，男性舞踊家４名，女性舞踊家４名），年齢は50歳代の音楽家が１名いるものの，主に20歳代後半から30歳代前半の，プロとして活躍しているアーティストである。

Ⅳ・１・３・２　1999年の場合

男性マネージャー１名，男性ジャーナリスト１名，男性大学教員１名を含めて17名（男性音楽家７名，女性音楽家１名，男性舞踊家３名，女性舞踊家３名），年齢は20歳代後半から30歳代前半の，プロとして活躍しているアーティストである。（ただし大学教員の年齢は50歳代）

Ⅳ・１・４　公演演目

Ⅳ・１・４・１　1997年の場合

前述した公演演目のコンセプトを基本にして，在日本エチオピア大使館やマネージャーの意向，エチオピアの舞踊を対象にした研究家チボー・バダセの論文（1970：119-146，1971：191-217，1973：213-231）なども参考にしながら，演目を選択した。会場によって若干異なるが，主な舞踊演目は，以下である。

１．アディ・アベバ…エチオピアの新年を祝う舞踊。エチオピアの新年は，９月初旬である。人々は冬が終わり，春になった

ことを喜びあう。マーガレットに似た「マスカル」と呼ばれる小さな花が咲き，辺り一面黄色に色づく。男性も女性も民族衣装を身にまとい歌い踊る。

2．ウォロ…エチオピア北東部ウォロの舞踊。ウォロの舞踊は，長い間アムハラ人の楽しみとされてきた。１人の美しい少女が川に水をくみにやってきた。田舎では若い農夫は女性と知り合う場として，川や市場を利用する。１人の男性が彼女に声をかけるが，内気な女性は答えない。しばらくして彼女の気持ちが打ち解けて来ると，女性は肩を動かしながら踊りだす。男性は女性の水入れを持ち，互いの友達を呼び皆で踊りだす。

3．ティグリニャ…エチオピア北東部ティグリニャの舞踊。２拍子の太鼓演奏から始まる。男女の太鼓を合図に，円になって回りながら踊る。人々はリズムに合わせて手をたたきながら，足を踏む。クラール（６弦のギター）の演奏が始まると，肩を上下に動かしながら踊る。歌詞は，美しいティグリニャの女性や地方を歌ったものが多い。

4．グムズ…エチオピア西部グムズの舞踊。男性が弓矢を持ち狩猟の様子を表現し，獲物をとらえると，女性も集まり，喉を鳴らすような声でララララを歌い，狩猟の成功を祝う。

5．グラゲ…アディス・アベバの南部グラゲの舞踊。膝を胸につけるように高く蹴りあげて体を前傾させながら踊り，また足のリズムにあわせて，顔に水をかけるように手をたたきながら踊る。これは，穀物を脱穀するときの動作に由来するといわれている。

6．ガンベラ…エチオピア西部ガンベラに住むアニュワの舞踊。腰を振り動かすなどの激しい動きとジャンプが多い舞踊である。

7．ウォライタ・コンソ…エチオピア南部ウォライタ・コンソの舞踊。腰から下肢を中心にした動きが特徴的である。舞台では，盾と槍を持って踊る戦闘舞踊が踊られた。

8．オロモ…アディス・アベバの南に住むオロモの舞踊。オロモは，エチオピアで最も大きな民族の１つである。（アルシ）オロモの女性は，激しく首を８の字に振り回しながら踊る。牧畜で使う棒を用い乗馬のような動きもあり，人々の生活が反映されている。

9．ソマリ…エチオピア東部とその隣国ソマリに広く分布するソマリの舞踊。ソマリ人は，ラクダを連れて水場を移動する遊牧民である。舞踊は，手と身体を使ったジェスチャーにあり，演劇的要素が強いのが特徴である。

10．ゴッジャム…エチオピア北西ゴッジャム地方に住むアムハラの舞踊。アムハラ人の舞踊の特徴は，肩と胸の動きを中心に動かすことで，エスケスタと呼ばれている。アムハラの舞踊では，誰が一番すぐれたエスケスタを長く続けられるのかを競い合う。エチオピアでは，人々が客席から舞台へ上がり，舞踊家と自分のエスケスタを勝負する。

11．ゴンダール…エチオピア北部ゴンダール地方の舞踊。ゴンダールは，17世紀ファシラダス王がゴッジャムから移り住み，

写真１　エチオピアの舞踊と和太鼓のコラボレーション
1997年12月　於：立命館大学　撮影：大学スタッフ

写真２　エチオピアの舞踊
1999年10月　於：佐久　撮影：佐久市役所スタッフ

歴史の中心となった地方である。ゴンダールのエスケスタは，ゴッジャムのエスケスタをさらに豊かに発展させた。胸にかけたクロスが，どれだけ遠くまで飛ばせるかによってエスケスタの素晴らしさを判断する。女性による鳥が水を飲むような動き，男性による闘鶏のような動きもあり，人々の生活が反映されている。

また，京都公演（12月９日，12月13日）では，エチオピアの舞踊と和太鼓のコラボレーションを実施した。

Ⅳ・１・４・２　1999年の場合

公演は，在日本エチオピア大使館のエチオピア文化週間の一環として行った。公演演目は，大使マハディ・アーメド・ガディドの意向を確認しながら決定した。しかし結果的には，1997年と同じになったため，公演演目の記載は割愛する。

Ⅳ・１・５　公演評価

Ⅳ・１・５・１　1997年の場合

観客数（概算）に関して言えば，東京では，一般人の他に，アフリカを中心とする数ヵ国の在日大使やその大使館関係者，東京に在住の多数のエチオピア人など600名，大阪では400名，京都と八日市では，観客数の正確な集計ができなかったが，入場者数は少なかった。公演演目は，前述したコンセプトに基づいて演目の構成を検討し，演目のアナウンス，ワークショップなどによってまるごとの舞踊体験ができるような工夫をした。また，東京会場のロビーでは，在日本エチオピア大使館の協力により，エチオピアのコーヒーセレモニーを実演することができ，会場を舞台の延長ととらえる目的が実現できた。会場の観客は，エチオピアの舞踊，その踊りの背景，人々の生活などを理解したようであり，舞踊公演は，拍手喝采をあび，好評を博した。

しかしながら，問題がなかったわけではない。松田（1998：34-35）が述べているように，１つは，エチオピアの高地文化中心になってしまい，とりわけウォロ，ゴッジャム，ゴンダールに代表されるアムハラの舞踊が強調されすぎたことである。これは，次に述べるもう１つの問題の表裏一体をなすものである。エチオピアの様々な民族の舞踊を踊ることができる舞踊家たちではあったが，現実には，舞踊家の出身であるアムハラ，オロモ，ティグレ，グラゲに限

られており，他の民族の舞踊は，本物とはいいがたかった。なかでもガンベラ（エチオピアの南西）に住んでいるアニュワ人の舞踊は，都市に暮らすアムハラ人の差別意識が創りだした舞踊ともいえ，下品で，野蛮で，嘲笑の対象として演出された舞踊を「民族舞踊」として紹介することは，公演の主旨に反する。ホンモノにこだわればアムハラ帝国主義を容認することになり，多様な民族文化にこだわればニセモノを見せることになる，というジレンマに陥り，結局在日本エチオピア大使館の意向もあって，後者に決めざるをえなかった。

次に，特筆すべきは，朝霞市立朝霞第四中学校・教員中條克俊と生徒たちが，社会科の授業の一環として，公演を鑑賞しワークショップに参加してくれたことである。中條は，中学生にアンケートをしたところ，アフリカのイメージは，暑い，黒人，ジャングル，動物であり，アフリカに住む人々のくらしについては全くといってよいほど未知の世界のようである，という結果から，国際理解教育においては，いまだに「脱亜入欧」であり，子どもたちの世界認識は，アジア・アフリカの視点が抜け落ち，「ひとごとの世界」になっており，特にアフリカの認識が乏しく，アフリカ諸国への共感も連帯感も乏しくなる，と思った。それを踏まえて，中条は，アメリカ合衆国とアフリカの２単元の連続性を重視した授業計画をたてた実践例を報告している[15)]。例えば，アトランタオリンピック，アトランタ出身のマーティン・ルーサーキング牧師，スティービー・ワンダーとアトランタ，オリンピックで活躍したアフロ・アメリカンと黒人アフリカ勢，南アフリカの男子マラソン選手チェグネワとエチオピアの女子マラソン選手ロバなど，様々な授業のアイディアを述べている。そのような授業を展開している折に，本公演に参加したわけである。公演に参加することによって，エチオピアの舞踊と文化や社会のことがよく理解できた，ということであった。

さて，アフリカの認識は，中学校だけではなく，小学校においてもあてはまる。開発教育研究者である西岡尚也（2007）は次のことを指摘している。小学校の世界地理学習の教科書において，記述分量で最も軽視されているのがアフリカであり，その内容は，プラスイメージが少なく，貧困・飢餓・難民などのネガティブ＝マイナスイメージが強調され，途上国に対する児童の正しい理解が妨げられている。第３世界への偏見をもたせない工夫をする必要があり，その際マイナスイメージを助長する内容は避ける必要があり，特に「純粋な子どもたちの世界への興味」「地域バランスのとれた世界認識」を伸ばし育てる視点が導入されるべきである，と。

上記より，マイナスイメージを伴わないアフリカの民族舞踊を上記教育の教材にすることは，意義が大きいと考えられる[16)]。

また，12月９日と12月13日に実施したエチオピアの舞踊と和太鼓のコラボレーションは，参加者の拍手喝さいを浴び，高く評価された。目的３で掲げた，新しい舞踊の隆盛に貢献したと思われる。

Ⅳ・１・５・２　1999年の場合

観客の動員数（概算）に関していえば，大阪では，御堂筋パレードに130万人，万博祭りに5,000人，名古屋では300人，東京では400人，佐久では500人，立命館大学では100人，京都精華大学では200人，なみはやドームでは2,000人であり，各会場で好評を博した。1997年の公演評価で述べたように，演目の構成に問題はあるものの，多くの日本人に紹介するという公演目的

の１つは達成された，といえる。

Ⅳ・２　ケニアの民族舞踊公演

Ⅳ・２・１　公演準備

Ⅳ・２・１・１　2003年の場合

公演の計画は，2001年秋に始まった。冒頭で述べたように2001年４月～2002年３月，遠藤は，ケニアに滞在し，日本学術振興会の仕事をしながら，ケニアで著名な音楽家の１人であるジュリアス・チャロ・シュトゥをインフォーマントにして，ケニアの舞踊と社会に関するフィールドワークを行った。その過程で，エチオピアに隣接するケニアの舞踊団を招聘して，アフリカの文化の多様性を紹介したいと考えた。

その前段として，2002年９月～2003年２月，ジュリアス・チャロ・シュトゥを国際交流基金フェローシップ（芸術家）として立命館大学が受け入れ，遠藤が協力者になった。研究題名は，「和太鼓との実験的共演を通じての日本音楽の研究」であり，ゼミ生と共に共同研究と実践活動を行った。その後，2002年12月，国際交流基金へ公演助成を申請しながら，1997年と同様に関係諸機関や個人に公演の協力・協賛の依頼を行った。2003年４月，同基金の公演助成が内定し，関係機関・個人の協力・協賛を得た結果，2003年10月，シュトゥを団長とするギリヤマ舞踊団を日本へ招聘することが可能になった。

Ⅳ・２・１・２　2006年の場合

2005年秋頃，伊丹アイフォニックホールから，アフリカの舞踊団招聘に関する打診があった。それをうけて準備を開始した。これまでと同様に，様々な諸機関・組織に連絡をしたが，協力・協賛が取れなかったため，本格的な公演は，１回のみになった。

写真３　ケニアの舞踊
2006年６月　於：ナイロビ　撮影：高橋京子

Ⅳ・２・２　公演日程

Ⅳ・２・２・１　2003年の場合

10月中旬，公演は，前橋，東京，横濱，豊中，大阪，京都，宇治，仙台（公演順）で開催した（表４参照）。

Ⅳ・２・２・２　2006年の場合

８月中旬，本格的な公演は，伊丹のみであり，他は立命館大学のオープンキャンパス出演や研究会出演などである。（表５参照）。

Ⅳ・２・３　招聘団員

Ⅳ・２・３・１　2003年の場合

招聘した舞踊団の団員は，男性団長兼音楽家１名含めて10名（男性音楽家兼舞踊家２名，男性音楽家１名，女性舞踊家６名），年齢は50歳代の音楽家が１名いたものの，他は20歳代から30歳代の，プロとして活躍しているアーティストである。

Ⅳ・２・３・２　2006年の場合

招聘した団員は，団長兼音楽家１名含めて８名（男性音楽家兼舞踊家２名，女性舞踊家５名），年齢は20歳代から30歳代の，プロとして活躍しているアーティストである。

表４　公演日程（2003年）

月　日	開演時間	場　所	対　象	入場料
10月９日	18：00	前橋，夢スタジオ，書上三代子トリオ with ギリヤマダンストュループコラボレーション	一般人	3,500円
	19：40	前橋，夢スタジオ，書上三代子トリオ with ギリヤマダンストュループコラボレーション	一般人	6,000円
10月10日	19：30	東京，BUDDY / バディ	一般人	1,000円
10月11日	16：30	横濱，横浜関内ホール大ホール，JAZZ PROMUNADE 出演（ジャズピアニストとのコラボレーション）	一般人	前4,000円 当5,000円
10月12日	10：00	豊中，駅前広場	一般人	無料
10月12日	13：00	大阪，御堂筋パレード	一般人	無料
10月15日	13：00	京都，立命館大学	一般人	無料
10月16日	19：00	京都，京都芸術センター	一般人	前1,800円 当2,000円
10月17日	12：30	宇治，京都文教大学	大学生	無料
10月17日	19：00	京都，京都芸術センター	一般人	前1,800円 当2,000円
10月18日	14：00	宇治，宇治公民館	一般人	無料
10月19日	12：00	仙台，宮城学院女子大学	大学生	無料

（筆者作成）

表５　公演日程（2006年）

月　日	開演時間	場　所	対　象	入場料
８月５日	13：00	立命館大学，オープンキャンパス	高校生 一般人	無料
８月５日	16：00	立命館大学	大学生	無料
８月６日	10：00	立命館大学	大学生	無料
８月７日	10：00	立命館大学	大学生	無料
８月８日	19：00	伊丹，アイフォニック・ホール	一般人	前3,000円 当3,500円

（筆者作成）

Ⅳ・２・４　公演演目

Ⅳ・２・４・１　2003年の場合

前述した公演演目のコンセプトを基本にして，ジュリアス・チャロ・シュトゥの意向，ケニアの舞踊や音楽を対象にした研究家ジョージ・セノガ・ザケの著書（2000），ボーマス・オブ・ケニアのプログラムなど参考にしながら，演目を選択した。会場によって多少異なるが，主な舞踊演目は，以下である。

１．ニャンティティ…ケニア西ビクトリア湖周辺に住むルオ人の舞踊。ニャンティティは，８弦のリラでルオ人が演奏する楽

器である。楽器の名称が舞踊の名称にもなり，結婚式，葬式などのセレモニーの時に踊られる。舞踊の動作には，コロブスモンキーの動作やカヌーを漕ぐ動作がみられる。

2．ボラナ…ケニア北部のマルサビット，モヤレに住んでいるボラナ（特に若人）の舞踊。ボラナ人は，家畜を飼って生計を立てているため，舞踊動作にもそれが反映去れ，牛の動きを模倣した動作などがみられる。結婚式などで踊られる。

3．チャカチャ…ケニアの海岸地方に住むバンツーの人々の舞踊。舞踊の特徴は，ベリーダンスをイメージさせる腰の動きにあり，アラビア的な要素も含まれている。結婚式や誕生日，その他めでたい機会に踊られる。娯楽として，あるいは子孫繁栄を願う祈りもこめて踊る，と考えられている。

4．ドウエ…ケニアの海岸地方の舞踊。ドウエとは，労働を意味する言葉であり，労働歌を歌いながら女性によって踊られる。女性は，この舞踊を農作物の収穫時あるいは穀物をすりつぶす時に歌い踊る。

5．オルトゥ…ケニア西ビクトリア湖周辺の舞踊。オルトゥとは，１弦楽器の名称であるが，舞踊の名称にもなっている。結婚式や葬式などの機会に，あるいは村の長老や老人を喜ばせるために踊られる。ビクトリア湖地域の人々は，船に乗り，漁労をして生計を立てている。それが舞踊動作にも反映され，魚を取っている様子やカヌーを漕いでいるしぐさがみられる。肩を振るわせる動作は，雨の神に感謝する動作とも考えられている。

6．マサイ…ケニアのリフトバレー周辺マサイ人の舞踊。戦争に出陣する戦士を励ますために，あるいは戦争が終わり，勝利を祝って踊られる。男性が，首を動かしながら高くジャンプする動作は，男性のエネルギーのシンボルで，それに対して女性の首のみを動かす動作は，男性のエネルギーを引き出すためと考えられている。首の動きは，キリンやダチョウの動きを模倣したと考えられている。

7．カラチョーニョ…ケニア西部のルオ地方で踊られる舞踊。結婚式で踊られたり，長老を楽しませるためにも踊られる。

また，前橋と横濱では，日本人プロのアーティストとのコラボレーションを実施した。

Ⅳ・２・４・１　2006年の場合

公演演目は，2003年の公演と重複した演目もあるが，新たに以下を加えて公演した。

1．ルオの舞踊…ニャンザ地方（西）のルオ民族の女性の舞踊。豊作を祝うものである。

2．キクユ…ケニア中央部キクユ民族の女性が踊る舞踊。男性の割礼儀式のためのものである。

3．ミジケンダ…沿岸地方ミジケンダ民族の女性たちが庭仕事の時に踊る舞踊

4．イスクーティ…西部地方ルーヤ民族の舞踊。子供の誕生を祝うものである。

5．チェチェメコ…沿岸地方に暮らすギリヤマの舞踊。様々な祝いの時に踊られる。

会場ロビーには，動物の彫刻，絵画，太鼓などを展示し，文化がわかるように工夫した。またアクセサリー，服，カバン等の物販も行った。

Ⅳ・２・５　公演評価

Ⅳ・２・５・１　2003年の場合

公演の観客数（概数）は，前橋200名，東京100名，横浜500名，大阪100名，京都500名，仙台300名である。ほとんどすべての会場で拍手喝采され，好評を博した。観客の主なアンケート結果は，１．ケニアのダイナミックな舞踊と音楽がすばらしかった，２．舞踊の動きの意味がわかってみると，舞踊の見方がかわる，３．簡単にみえる動きでも動いてみるとむずかしいなどであった。しかし，公演で演奏した太鼓・ジャンベは，西アフリカの太鼓であるため，ケニアの民族舞踊に演奏するのはおかしい，という意見もだされた。確かにジャンベのルーツをたどれば，そのとおりであるが，以下の２点からジャンベを演奏した。１．冒頭でも述べたように，今日のアフリカには，世界の様々な情報，人材，物資が流入しており，太鼓も例外ではない。今日のケニアでは，多くのアーティストが民族舞踊の公演にジャンベを演奏している。２．ケニアの他の伝統的な太鼓を演奏する場合，同時に複数の同じ太鼓を用意しなければならない。それらを日本へ運ぶのは，経済的な面から，むずかしい事情があったためである。

また，ケニアにいる民族は，様々であるが，言語系でいえばバントゥー語系，ナイル語系，クシュ語系に分類される。舞踊公演では，クシュ語系の舞踊はボラナだけで，バントゥー語系とナイル語系の舞踊に偏っている。これは，ケニアの国立劇場ともいえるボーマス・オブ・ケニアでも同じである。この理由としては，クシュ語系の人々は，一箇所に定住していないことや地域が広すぎることなどから舞踊の実態が把握できない，などが挙げられる（遠藤2005/2006：48-49）。現段階では，民族の多様性を反映させることがむずかしい状況にある。

さて，書上三代子や板橋文夫らとコラボレーションを行うことによって，今までにない音による表現や身体による表現が見られた。新しい舞踊の隆盛の一助になったと考えられる。

Ⅳ・２・５・２　2006年の場合

公演の観客数は，297名であった。公演の評価自体は，2003年と同じであるため，詳細は割愛する。

Ⅳ・３　タンザニアの舞踊公演

Ⅳ・３・１　公演準備

2006年春，林原フォーラム（林原財団主催）の一環としてタンザニアのチビテ舞踊団を招聘することから始まった。前回と同様に，タンザニアと舞踊のかかわりのある関係機関・個人に協力・協賛の依頼を行い，2007年冬，国際交流基金に公演助成の申請を行った。2008年２月，遠藤がタンザニアへ行き，招聘するチビテ舞踊団に聞き取り調査を行い，舞踊団の女性マネージャーと公演の概略を相談した。2008年４月，同基金の助成内定を受け，タンザニアのマネージャーとメールで公演の詳細を決めながら，以下のような舞踊公演が可能になった。

写真４　タンザニア　家族で踊るチビテ舞踊団
2008年２月　於：タンザニア　撮影：遠藤

表６　公演日程（2008）

月　日	開演時間	場　所	対　象	入場料
11月15日	14：00	伊丹，アイフォニックホール	一般人	前3,500円 当4,000円
11月16日	14：00	岡山，山陽新聞さん太ホール	一般人	無料
11月18日	10：30	京都，京都市国際交流会館	障害学級の生徒	無料
11月19日	13：00	宇治，京都文教大学	大学生	無料
11月20日	15：25	東京，青山学院大学	一般人	無料
11月22日	13：00	宇治文化センター	一般人	500円

（筆者作成）

Ⅳ・３・２　公演日程

2008年11月中旬，公演は，伊丹，岡山，京都，宇治，東京，宇治で開催した（表６参照）。

Ⅳ・３・３　招聘団員

招聘した舞踊団の団員は，女性マネージャー１名を含む舞踊家兼音楽家９名（男性４名，女性４名），年齢は，１名は50歳代，その他は20歳代から30歳代であり，チビテ（ゴゴ語で「さあ行こう」の意味）舞踊団の一員として活躍しているアーティストである。チビテ舞踊団は，タンザニアを代表する民族音楽家フクウェ・ウビ・ザウォセの子どもや親族が中心になってできたもので，日本を含めて世界50か国で公演を行っている。

Ⅳ・３・４　公演演目

前述した公演演目のコンセプトを基本にし，団員，マネージャーの意向を参考にして公演演目を決定した。様々な楽器演奏も含まれているが，主な舞踊演目は，以下である。

１．ムジキ　カジ…タンザニア中心部ドドマ州のブギリ村に住んでいたゴゴ人の舞踊。女性たちが，横一列に並んで太鼓を脚の間に挟んだまま肩を震わせながら激しく踊る。女性が脚の間に太鼓を挟んで歌い踊るゴゴ人独特の形式（ムヘメ）がある。祭りや収穫のときに踊られる。音楽を作ることも農作業や家畜の世話などか変わらない大切な仕事であるという内容の歌を歌う。

２．ヘコヘコ…タンザニア中央部シンギダ地方のニャトール人によるマウィンディという舞踊。肩や手足を激しく動かし，農作業を表現し，収穫を祝う。

３．チビテ　ワメクジャ…タンザニアと南の隣国モザンビークの国境にあるマコンデ人の舞踊。チビテの歌や踊りを聴かせたい，見せたいという内容である。

４．ワシリ　マリ　ヤ　ムニョンゲ…タンザニア国内の様々な民族の舞踊をミックスさせた舞踊。農業や牧畜などんな仕事も協力しながらやっていこう，という内容の歌を歌う。

５．ンゴークワ…タンザニア南部リンディ・ムトワラ地方のマコンデ人の舞踊。祝いなどの機会に踊られ，体のばねを使い躍動感がある踊りである。外面がよくても

内面もいいとは限らないという歌を歌う。

6．ジアンザ　リニ　ウェンザング…海岸地方の舞踊を中心に他の民族舞踊をミックスして踊る。人間は良い人ばかりではない，うそをついてはいけない，という歌を歌う。

7．ウチュミ　イェトウ…タンザニア北西部のムワンザ州などビクトリア湖の南側に多く住むスクマ人の舞踊。スクマ人は，農耕牧畜民である。舞踊では，それが反映され小道具として鍬，斧などを使って踊られ，農作業をがんばろうという歌を歌う。

8．ミゲニゲンデレ…タンザニア西部に多く住むニャムウェジ人の舞踊。手拍子を打ちながら歌い，踊る。仕事が終わってお互いをねぎらうときに歌い踊る。

また，舞台では，演目の合間にタンザニアの社会や文化がわかる説明を行った。例えば，廃品となった水道管を笛として利用していること，タイヤのゴムを再利用していること，大きな布（カンガ）の絵柄によって，身に纏う人々の気持ちを表現しているなど。

Ⅳ・3・5　公演評価

観客数の動員に関しては，伊丹314名，岡山300名，京都，国際交流会館105名，京都文教大学240名，東京200名，宇治350名であり，各会場とも盛況であった。観客の主な感想は，以下である：1．演奏と舞踊の迫力に圧倒された。2．予想以上に洗練されていれ，素晴らしい舞踊と音楽であった，3．タンザニアの社会や文化について触れることができたのでよかった，4．廃品から楽器を利用してつくるとは驚いた，5．大自然を守っていく私たちの使命を感じた，6．タンザニアの社会や文化がわかってよかった，7．今回がきっかけとなって，アフリカ文化に興味を持ったなど。

Ⅴ　まとめ

日本ではアフリカの民族舞踊に直接触れる機会が少ないという現状を踏まえて，筆者たちは，舞踊そのものを紹介しようとボランティア組織であるエチオプス・アート日本委員会を結成し，アフリカの民族舞踊公演を計画した。その目的は，1．アフリカの文化的多様性を日本各地で紹介すること，2．アフリカと日本との国際・文化交流，相互理解，平和友好の一助に資すること，3．舞踊の新しい隆盛に貢献すること，である。その際に，「舞踊まるごと体験」（アフリカで踊られている舞踊とそれにかかわる社会・文化を観る・知る・体験する）をキーワードに実施した。本稿では，日本の劇場で行ったエチオピア，ケニア，タンザニアの民族舞踊公演を検討した。その結果，舞踊や音楽を実際に聴き，観て，感じることにより，お互いの国際・文化交流，相互理解，平和友好に役立てることができたと思われる。しかしながら，以下の課題も生じたが，今後解決したいと考える：1．偏りなく民族舞踊を文化の多様性をいかに紹介するのか…エチオピアのアムハラ人の舞踊が多い，ケニアのクシュ語系の舞踊が少ないなど，2．創られた民族舞踊をどう考えるのか…エチオピアのアムハラ人の差別意識によって創られた舞踊ガンベラ，3．どこまでを民族楽器というのか…ケニア人が演奏する西アフリカの太鼓ジャンベなど。

最後に，芸術が市場として成立し営利経済の

中で機能する，いわゆる「商業芸術」もあるが，アフリカの舞踊公演は，それが成立しえない芸術だと思われる。本稿の事例が示すように，国際交流・理解のための１つの手立てとして重要かつ必要である。この観点からいえば，国際交流基金のような公演助成は，不可欠であると思われるが，今日では財政難のため公演助成が行われなくなった。これは，同基金だけに限ったことではない。1980年代に加速した官民挙げての文化ブームは，21世紀に入り景気後退と財政難で沈静化している。

このような厳しい社会経済環境の中においても，筆者たちのような民間レベルの文化活動は，必要であり，今後とも他の民間あるいは行政との連携をはかりながら，公演活動を実施していくことが必要なのではないだろうか。

おわりに

これまでのアフリカの民族舞踊公演実績をふまえ，今年は，ガーナの舞踊団を招聘し，ガーナの舞踊と社会を紹介し，国際・文化交流，相互理解の一端を担いたいと考えている。最後に，本稿でとりあげた公演の実施に際して，協力・協賛・公演をしてくださった国際交流基金，関係諸団体，組織，さらには資料収集に協力してくださった立命館大学・非常勤講師，相原進氏に心より御礼を申し上げます。

注

1）　1999年度国際交流基金人物の海外派遣助成事業。助成対象事業名「エチオピアと日本のダンスに関する比較研究」助成額966,000円の一環として行った。

2）　2005年度国際交流基金「文化財保存助成」事業，事業名称「モーションキャプチャを利用した舞踊動作のデジタルアーカイブ化事業」助成額4,018,910円。申請団体：立命館大学，事業担当責任者：遠藤保子，の一環として行ったものである。なお，研究成果報告は，この現地の以下の新聞において高く評価され，好評を博した：1. Sunday Vanguard, March 12 2006 Vol. 23 No. 1068924 pp. 40, 42　2. The Punch, March 10, 2006 Vol. 17 No. 19, 558 p. 45　3. This Day, March 12 2006 Vol.11 No. 3977 pp. 94-95 4. The Guardian, March 15 2006 Vol. 22 No. 9, 973 p. 66　5. Daily Sun, March 15 2006 Vol. 2 No. 673 p. 23　6. Daily Independent, March 15 2006 Vol. 3 No. 921 p. E7

2009年度日本学術振興会基盤研究（B）「モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊に関する総合的研究」研究代表者：遠藤保子　助成額2,900,000円の一環として実施した。

3）　2005年度日本学術振興会基盤研究（C）「今日のアフリカにおける身体表現と社会」研究代表者：遠藤保子，助成額1,000,000円の一環として行った。

4）　当初は，エチオピアの舞踊のみを対象にしたため，エチオプスという表現を用いた。しかし，アフリカの国境線は，文化の国境線とは一致しないという観点から，ケニアの舞踊と社会を紹介する公演も手掛け，徐々にアフリカの他の国も対象にして公演活動を行っている。

5）　大学院生とは，1997年～1999年は池田章子，2003年～2006年は高橋京子である。

6）　1997年度国際交流基金公演事業助成「クイーン・シバ民族舞踊団日本公演」助成額2,366,000円

7）　1998年度国際交流基金日本文化紹介助成「平和創造プロジェクト―エチオ・ジャパン　ハートフルセッション―」助成額2,090,400円

8）　1999年度国際交流基金公演事業助成「エチオピア民族舞踊団日本公演」助成額3,443,000円

9）　2003年度国際交流基金公演事業助成「ケニア民族舞踊団日本公演招聘事業」助成額1,250,000円

10）　2006年度（財）伊丹市文化振興財団助成「地球音楽シリーズ119『ケニアの律動』」助成額1,660,630円

11）　2008年度国際交流基金公演事業助成「タンザ

ニアチビテ舞踊団日本公演2008」助成額936,000円

12）　榊は，演劇で使われる「場」という言葉の意味を検討し，「場」とは，「場所」という物理的な空間を指すのではなく，人間同士の関係と場所空間が融合し合った概念として考えている。エチオプス・アート委員会では，「舞踊まるごと体験」をキーワードにしながら，アーティストと観客の国際・文化交流を公演目的の１つにした。したがって，劇場という場所は，「場」とも考えられる。

13）　発端は，1996年春ごろ，第13回国際エチオピア学会（1997年12月開催）準備委員会において，学会時にエチオピア舞踊団を招聘したほうがいい，という故福井勝義（京都大学・教授）の提案に基づいて始まった。

14）　アフリカの団員が，日本のビザを取得するためには，以下の書類が必要になる：１．身元保証書，２．招聘理由書　３．日本での滞在スケジュール，４．フライトスケジュール，５．フライトの領収書かフライトチケット，６．経済負担書，７．身元保証人の在職証明書，８．身元保証人の収入証明書など

15）　1996年９月～11月，中条克俊教員は，アフリカの授業を実施し，中條克俊「国際連帯の教育　中学生のアフリカ認識」日教組第46次教育研究全国集会報告書第15分科会　および1997年８月「中学生のアフリカ認識」歴教協第49回全国大会　於：宮城教育大学で発表している。

16）　遠藤保子は，共同研究者八村広三郎，崔雄，高橋京子らと共にナイジェリアの舞踊のデジタルデータをもとに，小学生を対象にした映像教材『ワンダーランド探検隊～アフリカの舞踊・音楽・社会～』を制作し，2008年度外務省主催第５回開発教育・国際理解教育コンクール「世界」をひろげるはじめの一歩に応募し，特別審査員賞を受賞した。

参考文献

Bomas of Kenya（出版年不記載：公式パンフレット）*Kenya Traditional Dances* Tourist Maps Africa, Nairobi pp. 9-16

遠藤保子 1998『舞踊における「劇場」的空間の変遷』財団法人水野スポーツ振興会研究助成金報告書　全146頁

遠藤保子 2001『舞踊と社会―アフリカの舞踊を事例として―』文理閣，京都　全211頁

遠藤保子 2005「アフリカの舞踊研究」日本体育学会編『体育学研究』第50巻第２号　pp. 163-174

Hanna, Judith L. 1965 “Africa’s New Traditional Dance” in *Ethnomusicology* 9 pp. 13-21

原田奈名子 2005「評価の視点から授業を構築する」大修館書店『体育科教育』53巻７号，東京　pp. 28-31

本田郁子 1991「民族舞踊・民俗芸能の教材化の可能性を探る」社団法人日本女子体育連盟『女子体育』33巻８号，東京　pp. 68-71

国際交流基金編 1978『国際交流基金年報　昭和53（1978）年度版』～国際交流基金編 2008『国際交流基年報　2007年度』，出版：国際交流基金，東京

松田　凡 1998「クイーンシバ・エチオピア民族舞踊団の来日」日本ナイル・エチオピア学会編『JANES ニュースレター　第13回国際エチオピア学会特集号』No. 7　pp. 32-35

松本千代栄 1957『舞踊美の探求―舞踊理論と指導法―』大修館書店，東京

西岡尚也 2007『子どもたちへの開発教育―世界のリアルをどう教えるか―』ナカニシヤ出版，京都

Senoga-Zake, G 1986 *Folk music of Kenya* Uzima press: Naribo

塩谷陽子 2006「国際交流とアーツ・マネージメント」清水裕之他編『新訂アーツ・マネージメント』放送大学教育振興会，東京　pp. 274-289

榊　眞 2008「演劇の「場」を創る試み―北海道の演劇シーンからみる「場」を考える―」日本アートマネージメント学会編『アートマネージメント』９号　pp. 62-73

Vadasy, Tibor 1970 “Ethiopian Folk ― Dance” *Journal of Ethiopian Studies* Vol. 8 No. 2 pp. 119-146

Vadasy, Tibor 1971 “Ethiopian Folk ― Dance Ⅱ” *Journal of Ethiopian Studies* Vol. 9 pp. 191-217

Vadasy, Tibor 1973 “Ethiopian Folk ― Dance Ⅲ”

Journal of Ethiopian Studies Vol. 11 pp. 213-231
全日本舞踊連合編 1977『舞踊年鑑』1巻～全日本舞踊連合編 2010『舞踊年鑑』34巻，全日本舞踊連合発行，東京
ドウブラー，N. マーガレット　松本千代栄訳 1974『舞踊学原論』大修館書店，東京

African Folk Dances Performed in Japanese Theaters

ENDO Yasuko *
MATSUDA Hiroshi **

Abstract: We have conducted fieldwork regarding African folk dances and presented our research in both Japan and Africa. Considering that Japanese audiences have few opportunities to be directly exposed to African folk dances, we set up a volunteer organization named the Aethiops Art Japan Committee to introduce African dances to Japanese audiences by holding public performances in Japan. Its objectives are to 1) introduce the cultural diversity Africa enjoys to Japanese people; 2) help facilitate international cultural exchange, mutual understanding, and peaceful and friendly relations between Africa and Japan; and 3) contribute to revitalizing African folk dances. We organized events with the key concept of providing "firsthand experience with African dances" — or see, know and experience African dances and the sociocultural background behind such dances. This paper examined Ethiopian, Kenyan and Tanzanian folk dances performed in Japanese theaters. As a result, it was found that Japanese people's exposure — listening, watching and feeling — to African dance and music performances has helped promote international cultural exchanges, mutual understanding, and peaceful and friendly relations between Africa and Japan.

Keywords: Africa, folk dances, theater, performance

＊Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University
＊＊Professor in the Department of Cultural Anthropology, Kyoto Bunkyo University